

『えこひいき』 ヤコブの手紙 2 章 1~7 節

1. 警告

本日の 2 章は、御言葉を聞いても実行しない人々に三つのことを警告しています。

- ①「えこひいきをするな」と警告されています。1~7 節
- ②「自由の律法を守れ」と戒めています。8~13 節
- ③「行いによって信仰を示せ」と警告しています。14~26 節

ヤコブは 1 章で、国外に散っているユダヤ人キリスト者に対して、さまざまな試練に会うとき、それをこの上もない喜びと思いなさいと勧めました。なぜなら、信仰がためされると忍耐が生じ、その忍耐を完全に働かせるなら、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた完全な人になることができるからです。神はそのために真理の御言葉によって、私たちが新しくお生みになりました。ですから、人間的には不可能であっても、神の御霊によって忍耐することができます。大切なのはその真理の御言葉を聞くだけでなく、それを実行することです。その御言葉の実践の一つとして勧められていることが、人を「えこひいき」してはいけないということです。2 章の冒頭がヤコブの実体験に基づくものであると思われます。実際の事例を通してヤコブは手紙の読者に教えようとしています。

2. 栄光のイエス・キリスト

ここでヤコブはイエス様のことを「**栄光のイエス・キリスト**」と言っています。出エジプト記 40 章 34~38 節に「**そのとき、雲が会見の天幕をおおい、【主】の栄光が幕屋に満ちた。モーセは会見の天幕に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、【主】の栄光が幕屋に満ちていたからである。イスラエルの子らは、旅路にある間、いつも雲が幕屋から上ったときに旅立った。雲が上らないと、上る日まで旅立たなかった。旅路にある間、イスラエルの全家の前には、昼は【主】の雲が幕屋の上に、夜は雲の中に火があった。**」とあるように、神の栄光は昔、神の幕屋に宿りました。そして、ヨハネの福音書 1 章 14 節に「**ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。**」とあるように、イエス様がこの地上に生まれた時、その栄光はイエス様に宿りました。

そして今日、コリント第一 6 章 19~20 節に「**あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。**」とあるように、彼を信じるすべての人に神の御霊が注がれたことによって、イエス様を信じるすべてのキリスト者にこの神の栄光が宿るようになりました。キリスト者とはそのような者なのです。神は、こんなに罪に汚れた者を赦してくださり、「**インマヌエル**」すなわち「**神は私たちとともにおられる**」という約束を実現してくださいました。私たちはこのイエス様を信じる信仰によって神の栄光を持つ者となったのです。であれば、もはや人の栄光とか、物質、あるいは富の栄光といったものは色あせてしまいます。そういうことで人を差別してはいけないのです。

3. 思いやり

「えこひいき」という言葉のギリシア語には、人を外見で判断するというようなニュアンスがあります。「人をかたより見る」というような意味です。神は「**彼の容貌や背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、【主】は心を見る。**」（サムエル第一 16 章 7 節）と言われました。「えこひいき」をしないとは、つまり「人をうわべで見ない」ということです。

イスラエルの神は常に貧しい人々、社会的に弱い立場にある人々を思いやり、寄り添う神であるということがこのテーマを考える上での根底にある事実です。そのことを教えているが申命記 15 章 7~11 節に「**あなたの神、【主】があなたに与えようとしておられる地で、あなたのどの町囲みの中でも、あなたの同胞の一人が貧しい者である**

とき、その貧しい同胞に対してあなたの心を頑なにしてはならない。また手を閉ざしてはならない。必ずあなたの手を彼に開き、その必要としているものを十分に貸し与えなければならない。あなたは心によこしまな考えを抱き、「第七年、免除の年が近づいた」と言って、貧しい同胞に物惜しみして、何も与えないことのないように気をつけなさい。その人があなたのことで【主】に叫ぶなら、あなたは罪責を負うことになる。必ず彼に与えなさい。また、与えるとき物惜しみをしてはならない。このことのゆえに、あなたの神、【主】は、あなたのすべての働きと手のわざを祝福して下さるからである。貧しい人が国のうちから絶えることはないであろう。それゆえ私はあなたに命じる。「あなたの地にいるあなたの同胞で、困窮している人と貧しい人には、必ずあなたの手を開かなければならない。」とあります。このように、貧しい人を思いやる神を礼拝する人々は、神に倣って貧しい人に思いやるべきだ、というのが聖書の教えです。イスラエル民族というのは、もともとはエジプトで奴隷として働かされていた人々でしたから、最初は貧富の差などなく、みな貧しく弱い人たちでした。しかし、彼らがカナンを征服し、そこで農耕生活を始めると段々と格差が大きくなっていきました。王制が始まると政治的な力だけでなく経済的な力も一部の人に集中するようになり、イスラエルは格差社会へと変貌していきました。律法は、そのような格差社会にならないように、7年に一度は奴隷を解放したり債務を免除したりするように教え、またヨベルの年と呼ばれる49年に一度の年にも全ての負債の免除を命じています。しかし、律法を守ることにあれほど熱心だったユダヤ人たちは、こうした債務免除の教えだけではいろいろと理屈をつけて守りませんでした。ですから律法を守っていればイスラエル社会は格差社会にならないはずだったのですが、実際には超格差社会になっていきます。このことは、すべての時代に当てはまることなのです。預言者たちは繰り返し、貧しい人々を顧みなさいと警告しましたが、イスラエル人の有力者や富豪たちはその警告に耳を閉ざし、その結果国が滅んでいきました。

4. えこひいき

さて、2~4 節に「**あなたがたの集會に、金の指輪をはめた立派な身なりの人が入って来て、また、みすぼらしい身なりの貧しい人も入って来た**とします。あなたがたは、立派な身なりをした人に目を留めて、「あなたはこちらの良い席にお座りください」と言い、貧しい人には、「あなたは立っていないさい。でなければ、そこに、私の足もとに座りなさい」と言うなら、自分たちの間で差別をし、悪い考えでさばく者となったのではありませんか。」とあります。ここでヤコブは、「えこひいき」とはどのようなことなのかを具体的な例を取り上げて説明しています。「**あなたがたの集會**」とあるのは、当時のキリスト者も一緒に集まって礼拝していたことを表わしています。そこにはいろいろな人々がやって来るわけですが、たとえばそこに二種類の人がやって来たとします。お金持ちと貧乏人です。そのような二種類の人がやって来た時、果たしてあなたはどのような態度をするのかということです。

3~4 節に「**あなたがたは、立派な身なりをした人に目を留めて、「あなたはこちらの良い席にお座りください」と言い、貧しい人には、「あなたは立っていないさい。でなければ、そこに、私の足もとに座りなさい」と言うなら、自分たちの間で差別をし、悪い考えでさばく者となったのではありませんか。**」とありますが、初代教会には、こうした社会的な問題があったことは否めません。主人が自分の奴隷の隣に座ったり、主人が礼拝に到着したら、その礼拝で自分の奴隷が礼拝の指導をしていたり、礼典の司式者であるということがあったからです。さらに圧倒的に貧しく、いやしい人々で満ちていた当時の教会の中に富んだ人が回心者として加えられることは、大きな誘惑であったに違いありません。

「えこひいき」という言葉は、「偏見」「差別」「分け隔て」「不平等」「特別待遇」「お気に入り」「偏愛」「なおざり」といった言葉にも言い換えられます。ヤコブの手紙では3回、この言葉が登場します。この「えこひいき」という言葉は、「顔を持ち上げる」という意味の言葉から来ています。その人の社会的身分や財産、この世的な影響力を不当に重視することによって人を偏って見てしまうことです。聖書はこのような態度を一貫して非難しています。

例えば、レビ記 19 章 15 節には、「**不正な裁判をしてはならない。弱い者をひいきしたり強い者にへつらったりしてはならない。あなたの同胞を正しくさばかなければならない。**」とあります。ここでは単に強い者にへつらうだ

けでなく、弱い者にひいきすることも戒められています。「ひいき」とは、気に入られるようにふるまうという意味ですが、強い者にペコペコするだけでなく、弱い者に気に入られるようにふるまうこともよくないというのです。たとえ相手が強い者であっても、弱い者であっても、正しく接するようにと教えているのです。それは神が公義であられるからです。ですから、その神を信じて歩む者にも公平さが求められているわけです。人を差別してはいけ
ない、偏見を抱いたり、「えこひいき」してはいけないということです。

5. 解決方法

たとえ現実的にそのような問題があったとしても、教会は一切の社会的差別が取り除かれたただ一つの場所でした。なぜなら、教会は「**栄光のイエス・キリスト**」が臨在しておられるところであり、この方の前には格付けや身分や名声といった一切の差別がないからです。自分の罪と汚れの大きさをみるならさばかれても致し方ないような者が救われたのでありますから、そこにあるのはただ神の恵みだけなのです。この神の卓越した栄光の前には、人の功績や価値の差別といったものは何もないのです。

にもかかわらず「**自分たちの間で差別**」を設けるならば、その人は「**栄光のイエス・キリスト**」を信じているというよりも、この世の富に足を取られているのであり、二心のある人なのです。そういう人は、その歩む道のすべてに安定を欠いているのです。そのような人に求められていることは、「**栄光のイエス・キリスト**」を信じる信仰を持つことであり、このイエス様の目とイエス様の心を持つことです。私たちはいつでも、人を「**栄光のイエス・キリスト**」を通して見て、判断し、受け入れるべきなのです。

「**えこひいき**」の問題に対して、ヤコブは「**あなたがたは私たちの栄光の主イエス・キリストを信じる信仰を持っているのですから**」という前提を記しています。これはどういうことを意味しているのでしょうか。それは、教会が、あるいは主にある者たちが「**人をえこひいきしない**」という生き方をするためには、「**栄光のイエス・キリスト**」に目を留めなければならないということです。**栄光の主**に学び、その主に倣い、主と同じ心、同じ思いが心を支配するようにならなければならないということです。なぜなら、この方こそ、「**公正な唯一のお方であり、完全な公平さを持っておられる方**」だからです。

経済的な豊かさを基準にして人間を差別する態度は、神がすべての人々を分け隔てることなく扱ってくださる公平さと矛盾しています。このことについて律法も申命記 10 章 17～19 節で「**あなたがたの神、【主】は神の神、主の主、偉大で力があり、恐ろしい神。えこひいきをせず、賄賂を取らず、みなしごや、やもめのためにさばきを行い、寄留者を愛して、これに食物と衣服を与えられる。あなたがたは寄留者を愛しなさい。あなたがたもエジプトの地で寄留の民だったからである。**」と教えています。神は、この世の貧しい人々を選んでくださいました。5～7 節に「**私の愛する兄弟たち、よく聞きなさい。神は、この世の貧しい人々を選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束された御国を受け継ぐ者とされたではありませんか。それなのに、あなたがたは貧しい人を辱めたのです。あなたがたを虐げるのは富んでいる人たちではありませんか。また、あなたがたを裁判所に引いて行くのも彼らではありませんか。あなたがたがその名で呼ばれている尊い御名を汚すのも、彼らではありませんか。**」とあります。なぜ貧しい人を軽蔑してはいけ
ないのでしょうか。それは、神がこの世の貧しい人々を選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束された御国を相続する者とされたからです。

イエス様がナザレで最初の説教をした時、ルカの福音書 4 章 18～19 節で「**主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、目の見えない人には目の開かれることを告げ、虐げられている人を自由の身とし、主の恵みの年を告げるために。**」と、イエス様が遣わされたのは、貧しい人々に福音を伝えるためであると述べました。イエス様は絶えず貧しい人々に特別な伝言をもたらしてきたのです。

また、イエス様の山上の説教のマタイの福音書 5 章 3 節で「**心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。**」というものでした。イエス様の目は絶えず貧しい人々に注がれていたのです。それは、富んで

いる人はどうでもいいということではなく、貧しければ貧しいほど、信仰による豊かさを求めるからです。しかし、富んでいれば神よりもっと富を求めるようになります。イエス様は、「**医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人です。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです。**」(マルコ 2:17) と言われましたが、それはそういう意味です。決して富んでいる人には救いが必要ないということではなく、富んでいる人が砕かれて、主の救いを求めることは難しいということです。

しかし一方で、それは神の計画であったともいえるのです。そのように神が弱い者たちや取るに足りない者たちを選んでくださることによって、有る者を無い者のようにしようされたのです。そのことをパウロは「**兄弟たち、自分たちの召しのことを考えてみなさい。人間的に見れば知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選ばれました。有るものを無いものとするために、この世の取るに足りない者や見下されている者、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです。**」(コリント第一 1 章 26~28 節) と言っています。神はこの世の知恵ある者や力ある者ではなく、普通の人、いや無に等しいような者を選ばれたのです。それは、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束されている御国を相続する者にするためです。それなのに、こうした貧しい人たちをないがしろにするようなことがあるとしたら、それは全く神の御心になかったことではないと言えます。むしろ、あなたがたをしいたげるのは、そのように富んだ人たちなのです。

イエス様のたとえ話の中に、七を七十倍するまで赦しなさいという教えがありました。1万タラントの借金を免除してもらったしもべが、「**ところが、その家来が出て行くと、自分に百デナリの借りがある仲間の一人に出会った。彼はその人を捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。彼の仲間はひれ伏して、『もう少し待ってください。そうすればお返しします』と嘆願した。しかし彼は承知せず、その人を引いて行って、負債を返すまで牢に放り込んだ。**」(マタイ 18:23~35) とあります。当時はそういうことが実際にありました。そして、そのようなことをするのはこうした富んだ人たちなのに、どうしてあなたはそのような人たちにへつらい、貧しい人たちを軽蔑するようなことをするのか、とヤコブは言うのです。

6. キリストに似る者

7 節に「**あなたがたがその名で呼ばれている尊い御名を汚すのも、彼らではありませんか。**」とあります。「**尊い御名**」とはイエス・キリストという名前のことです。私たちは、「クリスチャン」あるいは「キリスト者」と呼ばれています。これは、キリスト教の信者「小さなキリスト」「キリストにつく者」「キリストに倣う者」「キリストに属する者」あるいは、「キリストに似た者」という意味です。ちなみに「キリスト者」と初めに呼ばれたのは使徒の働き時代にあります。使徒の働き 11 章 26 節に「**彼を見つけて、アンティオキアに連れて来た。彼らは、まる一年の間教会に集い、大勢の人たちを教えた。弟子たちは、アンティオキアで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。**」とあります。キリストに本当に似たようなことを語り、似たようなことを行なっていたので、人々は信者たちをそう呼びました。もし、私たちが、キリストとは似つかぬことを行なえば、キリストの御名が汚されます。

聖書は、人間社会の中である程度の貧富の差が生じるのは認めています。一生懸命働いた人と、怠けた人の間で差が生じるのは自然なことです。しかし、その格差がどこまでも広がっていいともいいません。それに限度を設け、また格差が永久に固定化されないように、リセットするための教えを設けています。その代表的なものが「ヨベルの年」でした。しかし、残念なことにそうした聖書の教えは聖書の民の間で守られてこなかったのです。

このような聖書の教えを踏まえたうえで、私たちは何ができるでしょうか。私たちは小さな者です。しかし、身の回りの小さなことならばやれることはあるはずです。そして何よりも、間違っても貧しい人に対して偏見を持つべきではないというのが今日のヤコブの教えの大事なポイントでした。なぜなら神は、そのような貧しい人に寄り添う神であり、貧しい人を侮ることは神を侮ることになるからです。ヤコブの教えを日々の生活で生かすことができるように、祈りましょう。